

<書評>シャラリン・オルバー著『パフォーマンスとしてのプロパガンダ：十五年戦争期の紙芝居』

著者	陳 其松
雑誌名	日本研究
巻	54
ページ	148-151
発行年	2017-01-31
その他の言語のタイトル	<Book Review>Sharalyn Orbaugh. Propaganda Performed: Kamishibai in Japan's Fifteen-Year War. Leiden: Brill, 2014.
URL	http://doi.org/10.15055/00006433

シヤラリン・オルバー著
『パフォーマンスとしてのプロパガンダ——十五年戦争期の紙芝居』
Sharalyn Orbaugh. *Propaganda Performed: Kamishibai in Japan's Fifteen-Year War*.
Leiden: Brill, 2014.

陳其松

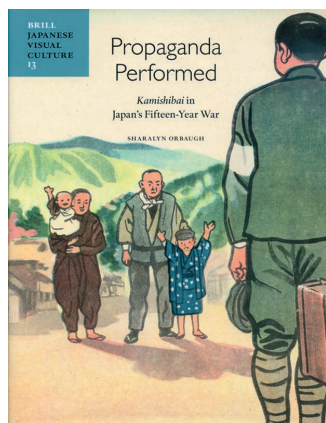


図1 街角紙芝居の風景 (p. 41)

一九三〇年代に誕生した紙芝居は、古く絵巻、江戸時代の写し絵、立絵などの視覚媒体から図を主体とした物語を語る形を受け継いだ。絵、文字、演出の三つの要素で成り立つ紙芝居は数年の間に広く普及し、とくに庶民層を中心に根強い人気を誇った。やがて『黄金バット』などの有名作の

後押しで、全盛期には全国で三万人以上の語り手が歩きまわっていたと言われる(図1)。しかしまもなく日本が戦時体制へ転換したため、紙芝居の演出も厳しく規制されるようになり、増産報国、英雄美談などをメンテーマとする、所謂「国策紙芝居」に転身せざるを得なくなった。シヤラリン・オルバー氏の『パフォーマンスとしてのプロパガンダ——十五年戦争期の紙芝居』は、紙芝居が庶民娯楽から宣伝媒体へ転向した一部始終を追及した力作である。本書には、三百枚余りの図版・写真が収録され、資料集としての性格も兼ねている。そのうち『ほがらか部隊記』はじめ、『お米と部隊』、『五間の手紙』など貴重な紙芝居七本が全編復刻、英訳された。研究者は無論、一般読者でも純粋に紙芝居の魅力を楽

しめる一冊である。

本書は五章に分かれており、第一、二章は紙芝居の略史、演出、特徴などや、戦時中の政府規制による「街頭紙芝居」から「国策紙芝居」への転換背景を概観する。第三章から第五章は紙芝居の解説を中心に、それぞれ子供向け、成人向け、軍人向けの紙芝居を分析している。最後に、プロパガンダの宣伝に加担した紙芝居のメカニズムを試論し、締めくくるという構成である。

国策紙芝居のなかの女性

解説を読み進むと、国策紙芝居がいかに細かく観客層を想定し、制作されていたかが明らかとなる。例えば子供に防空訓練のノウハウを教える『ナカヨシバウクウゴウ』、増産を奨励する『家』『増産必勝』『お米と部隊』や、軍人の武勇を称える『父の手紙』、商業界の支援を呼びかける『敵降る日まで』、貯金を呼びかける『五間の手紙』などがあり、いずれも国家への総力応援を呼びかける内容である。なかでも女性像がとくに緻密に分析され、彼女たちの忍耐強く、家族や国家に献身的な姿が躍然としている。とくに『母は漫才師』の中の、漫才師として前線へ赴く母の戦死が知らされた娘が人目を避けたところで母の名を叫ぶシーンや、『軍神の母』において、パールハーバーでの自殺攻撃で犠牲となった息子を偲びながら、重労働を続けた母親の姿は代表的である。また

紙芝居を通じ、東西女性像を比較する一節も印象的である（p.174-178）。戦時中、「贅沢大敵！」と政府が掲げた以上、個人の美を求めることはまさに非道徳的であり、家族にも恥をかかせる行為である。そのため紙芝居において、標準服のもんぺを誇らしげに身に纏う女性たちの姿が目立っている。『弾を戦地へ』という話においても、最初は美しい洋服に憧れた主人公が、やがて戦争の緊迫した状況から国民の責任に目覚め、もんぺを着るようになるのである。これに対し、同時期のイギリスにおいては女性の外見の美への追求は比較的に寛容であつたと著者は指摘する。むしろ女性の「美」こそが、戦士たちの癒やしであり、守るべきものであると認識されたという。

戦争の表現

表現方式に関しては、従来のグロテスクやセンセーショナルな表現が規制されたため、国策紙芝居では戦場の残酷な直接的描写は控えめである。しかしその一方、紙芝居の多くが、戦争による死別や貧困などの社会問題を粉飾なく率直に描写している。戦争の悲惨さを想起させる内容は国策宣伝の趣旨に反していないかと著者は疑問を投げかけている。国策に応じることで奨励された例は無論あるものの、前述の『母は漫才師』、『軍神の母』のような、主人公の献身的な愛国行為は結局報われないどころか、家族との死



図2 息子との死別。『母の顔』より (p. 200)

いったいどう解釈すればよいのであろうか。

上記の疑問について、著者は戦争の残酷さと非合理性が紙芝居の演出を通じ、浄化された可能性を示唆している。つまり紙芝居が戦争に対する「心身的に無害無痛であるという誤認識」を民衆に植え付け、また共同の鑑賞経験、民族の連帯感、主人公に対する同情心などの相乗効果により、さらに増幅させたという。その一方、紙芝居の「洗脳効果」に対する過大評価を避けようとするため、著者は自身の近代アメリカの国家主義に対する複雑な感情を例にし、日本人も実はこのような戦争宣伝に憐れみ、怒り、感心など複数の感情を意識的にか無意識的かはわからないが、同時に抱いたのではないかと推測している。ここにおいては、確かに、

別で話が終わる例も多数存在する(図2)。それに実際に当時の人気番付、回想録などの史料を確認すると(p. 181-182)、悲劇的結末による紙芝居の人氣への悪影響が見当たらないどころか、会場の観客が全員感極つて涙を流し、純粹に感動したという記述さえ残されている(p. 201)。この現象は

著者が着眼した紙芝居の鑑賞経験における構造的、心理学的なメカニズムの可能性は否めない。しかしその解釈はメディアとしての普遍性に基つき、映画や演劇など他の表現方式と比べて、紙芝居の独自性については明言されていない。なお観客の回想録に書かれた「感動した」という声を、「無意識」で説明して良いのかどうかやや疑問が残る。『軍神の母』など「陰鬱」な話の高い人氣の下支えに関しては、文化面や精神面などの視点も取り入れ、多元的に議論する余地があるのではないかと感じる。

紙芝居の精神・文化的背景

ここで一つ、子供向けの宣伝紙芝居、『健ちゃんバンザイ』という例を挙げてみたい。あらずじとしては、結核を患った健ちゃんそれぞれの臓器が、冒険に行き力をつけることで病気を打ち負かすという、一見単純明快な科学教育劇的な構成になっている。しかし、冒険の途中、臓器たちに助けの手を差し伸べたのは意外にも神道の神々である(図3)。結局、神々のご加護があるからこそ、健ちゃんは健康を取り戻せた。ここにおいては、「衛生」、「健康」など近代科学由来の概念とともに、「神」など宗教的、精神的な概念が植え付けられている。『健ちゃんバンザイ』に描かれた神道と身体(精神と物質)の関係には、明治以来日本国民の文化、精神構造の一側面が反映されているとも言えるのであろう。国策紙

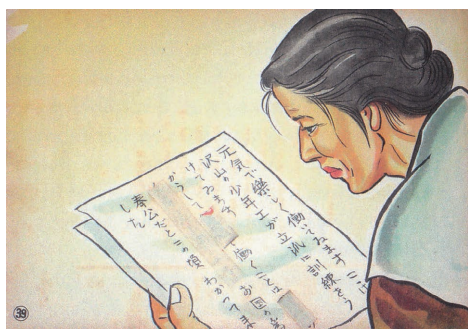


図4 図面の修正 (p. 201『母の顔』より)



図3 健ちゃんの心臓が神に助けを求める
(p. 155『健ちゃんバンザイ』より)

芝居のいわゆる「宣伝効果」も、このような特殊な時空背景に置かれたからこそ発揮できたかもしれない。念をおすと、プロパガンダを「文化的」に見るスタンスは、決して戦争の歴史を無責任に相対化し、あるいは日本文化と軍国主義を本質主義的に結びつけようとするものではない。むしろ「国策紙芝居」を「政治的」という固定概念から開放させたほうが、より鳥瞰的、多元的な視角でその全貌を見定められるのではないかと考える。著者も指摘しているように、国策紙芝居の演出内容、方式が厳しく規定されていたにもかかわらず、一部の紙芝居の内

容や図面には演出者の直筆修正が施されているのである(図4)。

また紙芝居でたびたびもんぺを女性の標準服として提唱することの裏側に、歌手の淡谷のり子が外見の理由でもんぺ着用を拒否したという事件から目を背けるわけにはいけない。これらの事例が物語るように、「規制」があつてこそ「逸脱」が生じてくる、一種のイタチごつこのようである。この視角からみるプロパガンダの生成はより流動的、相対的であり、決して一方通行ではない。そもそも紙芝居が宣伝媒体として採用された理由も、その大衆文化としての人気にある。つまり、国策紙芝居であれ教育紙芝居であれ、政府からの「宣伝物」である前に、観客たちが楽しめる「文化物」でなければならぬ。紙芝居を文化的、多面的に捉えることにより、プロパガンダ批判の方向性も大きく変わってくると思われる。

著者による紙芝居の復刻、英訳は、まさに我々に歴史と真摯に向き合うチャンスを与えて、今後「紙芝居」を多面的、多文化的に検討する可能性を示してくれた。本書の繊細かつ彩色の図版を眺める時、一瞬だけでも話に夢中なつた子供たちや、涙を堪えた人々の気持ちとシンクロできれば、「プロパガンダ」による「プロパガンダ」を批判する危険性を少しでも回避できるのではなかろうか。